

# イギリス詩の研究

圓月勝博

伝統ある本欄の執筆を光栄にも担当させていただくようになってから数年が経つが、「イギリス詩の研究」とは何か、という根本的な問題については、触れないようにしてきた。この点について、いったん論じ始めたら、紙面がいくらあっても足りなくなるからである。ところが、中尾まさみの『英語圏の現代詩を読む——語学力と思考力を鍛える12講』（東京大学出版会、2017.7）が手元に届いたので、本年度は頬被りをしているわけにもいかなかった。

中尾の上記著作は、研究と教育の接点を意識しつつ、多彩な現代詩を次々に読み解きながら、「イギリス詩の研究」とは何か、という問いについて、読者一人ひとりに考えさせる入門書である。各講の最後に置かれた[詩人紹介]の中に登場する詩人の出身地を分類すると、アイルランド(北アイルランドを含む)3、アメリカ1、イングランド2、ジャマイカ1、スコットランド4、ニュージーランド2となる。この人選を前にして、「イギリス詩」の自明性を擁護しようとしても空しいだけだろう。ただし、「イギリス詩の研究」とは何か、というパンドラの匣をいったん開けると、希望とも災厄とも判別不能のさらなる問いが次々に飛び出してくることも覚悟しなければならない。英語圏全体に射程を広げるなら、現代グローバル社会の熱い視線を集めるインドやシンガポールにこそ、詩の次世代読者の関心を誘導するべきではなかったか。スコットランド出身の桂冠詩人キャロル・アン・ダフィを紹介するのなら、彼女が女性であることだけではなく、一児の母でありつつLGBTであることにも論を進めるべきではなかったか。ダブ・ポエトリーを紹介するのなら、リントン・クウェシ・ジョンソンも悪くないが、2009年のBBC詩人国民人気投票において、T.S.エリオット、ジョン・ダンに次いで堂々3位に輝いたベンジャミン・ゼファナイアに白羽の矢を立てて、彼の朗読パフォーマンスをYouTubeで片っ端から視聴することを勧めるべきではなかったか。作品の英語原文に触れる機会さえ少ないこの和書を読んで、語学力が鍛えられたという実感はないが、思考力の鍛錬という効能については、副題の看板に嘘偽りなしと太鼓判を押す。

本年度の出版物番付で、中尾の著作を東の横綱とするならば、西の横綱に吉中孝志の『花を見つめる詩人たち——マーヴェルの庭とワーズワスの庭』（研究社、2017.12）を推挙することに誰も異存はあるまい。自家菜籠中のアンドルー・マーヴェル研究を出発点として、著者最愛の詩人ヘンリー・ヴォーンを補助線としながら、ロマン派詩人ウィリアム・ワーズワスの本格的な研究に歩みを淡々と進めていく品格ある学術書

## イギリス詩の研究

である。上記著作の書名を見ただけで、「イギリス詩の研究」の領域を隣接分野に向かって押し広げた往年の碩学である川崎寿彦の『マーヴェルの庭』(研究社, 1974.3)や『庭のイングランド——風景の記号学と英国近代史』(名古屋大学出版会, 1983.5)などの名著の記憶がよみがえる。「あとがき」の中の吉中の卓抜な表現を借りるなら、「かつて英文学者が偉かった(偉い人として扱ってもらえた)時代」の輝かしい記憶であるが、吉中の上記著作は、そのような過去の栄光を取り戻そうとするのではなく、むしろ隣接分野から意図的に撤退して、作者と読者の個人的な体験という読書行為の原点に回帰してみせる。

「イギリス詩の研究」から夾雑物を除去しようとする吉中の業務整理方針は、フェミニズムやポストコロニアリズムは言うまでもなく、英語教育論争にもあわよくば参戦しようとする機会をうかがう中尾の事業拡大路線とは見事なまでに好対照である。「かつて英文学者が偉かった(偉い人として扱ってもらえた)時代」の威信の回復に向かって八面六臂の活躍を示す中尾と、「かつて英文学者が偉かった(偉い人として扱ってもらえた)時代」の呪縛を振りほどこうとする吉中は、真っ向から対立するかのように見えるかもしれないが、「イギリス詩の研究」の自明性の喪失に対する危機感が両者を結びつけていることを忘れてはなるまい。どちらの論者の立場を支持するかは、ひとまず読者一人ひとりの判断に任せよう。

『詩について——アンドルー・マーヴェルから』(松柏社, 2017.6)という簡素な書名を掲げて、個人論集をまとめた加藤光也は、「かつて英文学者が偉かった(偉い人として扱ってもらえた)時代」に一世を風靡した東京都立大学(現首都大学東京)の学風の掉尾を飾る百戦錬磨の研究者である。マーヴェルを書名に掲げて、政争に淫した彼の風刺詩にはほとんど興味を示さない点は、吉中と共通している。形而上詩人と王党派詩人の伝統が風前の灯となったとき、その両者の往年の輝きを知るマーヴェルがひそかに書き残した珠玉の抒情詩の「滅びてゆく詩のことば」(1ページ)が吉中や加藤のような孤高の学者を惹きつけてやまないらしい。ただし、ワーズワスという自ら定めた目的地に向かって文学史的に論を展開する吉中に対して、上記著作の副題が暗示するように、目的地を定めることにさえ興味を示さない加藤は、アレグザンダー・ポープ、ジェフリー・ヒル、ロチェスター伯爵、シルヴィア・プラスとテッド・ヒューズ、シェイマス・ヒーニー、ウィリアム・バトラー・イェイツ、与謝野晶子、萩原朔太郎を時系列も国籍もお構いなしに取り上げる。おもしろい作品と出会って、そのおもしろさを心行くまで語り尽くす以外に何が文学研究に必要なかどうか。潔い本である。

横綱級の上記3冊の紹介に力が入ってしまったが、本年度は、それ以外にも注目すべき研究成果が汗牛充棟なので、紙面の制約が恨めしい。たとえば、水野眞理・村里好俊・竹村はるみ共編の *Spenser in History, History in Spenser: Spenser Society Japan Essays* (大阪教育図書, 2018.3) は、日本スペンサー協会初の英文論集である。

## 回顧と展望

エドマンド・スペンサーをめぐる、アイルランド問題に関心を向けた水野論文やエリザベス朝祝祭文化に注目した竹村論文に加えて、『妖精の女王』第1巻の信仰の表象を丁寧に論じた足達賀代子論文のように、秀逸な論考が収録されている。本論集企画の立役者でもある水野は、『英文学評論』第XC集(京都大学大学院人間・環境学研究所英語部会, 2018.2)にスペンサーの『アイルランド状況管見』の受容史論も寄せており、編者に名前を連ねた重鎮の村里は、『九州英文学研究』第34号(日本英文学会九州支部, 2018.1)にソネット論を発表しており、スペンサー研究者の破竹の進撃に喝采を送りたい。ソネット研究と言えば、マイケル・ドレイトン『アイデアに捧げる愛の詩集』(国文社, 2018.9)という学術的にも価値がある翻訳を完成した岩崎宗治の衰えぬ筆力に脱帽する一方、『東北学院大学論集』第102号(東北学院大学学術研究会, 2018.3)と『東北学院大学英語英文学研究所紀要』第43号(2018.3)のそれぞれに力作論文を立て続けに公表した箭川修の早過ぎる訃報に断腸の思いも味わった。ご冥福を祈る。

十七世紀英文学会編『17世紀の革命/革命の17世紀』(金星堂, 2017.9)の中にも、ラテン語の学識を駆使した岩永弘人の丁寧なソネット論が収録されており、19世紀イギリス詩研究の分野でも、笹川浩が「ホプキンズのソネットを読む(その三)」を『英語英米文学』第58集(中央大学英米文学会, 2018.2)に連載を続けているところを見ると、ソネットの再評価という静かな機運があるようだ。短い定型詩なので、詩の出番が見つけにくい現代の大学教育においても、教材として比較的取り上げやすいことがその一因かもしれない。他方、上記論集には、笹川渉と野呂有子によるジョン・ミルトンの長編叙事詩『失樂園』論なども収録されていて頼もしく思ったが、前世紀の学界を席卷した革命史観に対する修正が盛んに加えられている今、その種の研究動向には無頓着な『17世紀の革命/革命の17世紀』という昔ながらの書名を掲げた出版物が見識ある読者の目に留まるかどうか他人事ながら不安を覚えた。学会動向とは別に、高橋正平『ジョン・ダン研究』(三恵社, 2017.12)が出版されており、ダンの散文作品『イグナティウスの秘密会議』を扱った2編の論考には、とりわけ希少価値がある。『津田塾大学紀要』No. 50(津田塾大学全学研修・紀要委員会, 2018.3)に掲載された阿部曜子のジョン・ドライデンのオード論も簡潔ながら力作で、今後のさらなる展開に期待したい。

18世紀イギリス詩に関しては、『研究論集』No. 106(関西外国語大学, 2017.9)と『リーディング』第38号(東京大学大学院英文学研究会, 2017.12)に大住めぐみと広本優佳がアレグザンダー・ポープの『髪の掠奪』をめぐる達意の英語で書かれた論文をそれぞれ寄せている以外には、特筆すべき成果が見つからなかったことが大変残念だったが、それを補って余りあるほど、ロマン派研究は、今年も活況であった。肩の凝らない読み物としても楽しめる山田豊の『ワーズワスと紀行文学——妹ドロシー

## イギリス詩の研究

とともに』（音羽書房鶴見書店、2018.3）が出版される一方、原田博のパーシー・ビッシュ・シェリー『プロミーシユース解放——およびその他の詩集』（音羽書房鶴見書店、2017.10）や道家英穂のロバート・サウジー『タラバ、悪を滅ぼす者』（作品社、2017.10）などの貴重な翻訳も次々に上梓された。ロマン派研究の事業拡大路線の旗手の一人であるアルヴィ宮本なほ子は、著者の所属組織が提唱する総合文化研究の名に恥じない脱領域的論文2編を『比較文学研究』第103号（東大比較文学会、2017.9）および *Odysseus* 第22号（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻、2018.3）に寄せており、『言語・情報・テキスト』第24巻（東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻、2017.12）に意欲的な学際的論考を寄稿した大石和欣と競い合っている。他方、『イギリス・ロマン派研究』第42号（イギリス・ロマン派学会、2018.3）は、ウィリアム・ワーズワスをめぐる大石瑤子と騎馬秀太の堅実な論考2編およびシェリーをめぐる木谷徹の丁寧な作家論1編を掲載して、流行に左右されない編集方針を崩さない。『近代』第117号（神戸大学『近代』発行会、2018.2）に公表された松家理恵の論文も、ウィリアム・ハズリットのワーズワス批評を論じて、地道な基礎研究ならではの貴重な知見を示している。貴重な知見とえば、ロマン派以降に時代が少し下がるが、『大阪大谷大学紀要』第52号（大阪大谷大学志学会、2018.2）に掲載された服部慶子論文は、ブランウェル・ブロンテの詩を取り上げて、ブロンテ研究に新たな奥行きを与えている。

モダニズム以降に目を移すと、『関西英文学研究』第11号（日本英文学会関西支部、2018.1）にウィリアム・パトラー・イエイツ研究の第一人者である山崎弘行が W. H. オーデンのイエイツ観をめぐる包括的な論考を寄せており、『城西人文研究』第33巻（城西大学経済学会、2018.3）に掲載された小堀隆司の『幻想録』論とともに、イエイツ研究の健在ぶりを示している。T.S. エリオットに関しても、『アレーテア』第32号（アレーテア文学研究会、2017.12）に日本 T.S. エリオット協会元会長の村田辰夫が達意の論文を寄稿する一方、『教養主義の残照』（開文社出版、2018.3）には同協会現会長の野谷啓二の貫録の論考が収録されており、エリオット研究の健在ぶりも確認できて愉快な心持ちになった。ところが、30年以上続いた同人誌である前者の扉には「終刊号」の文字があり、後者の単行本には60年近く続いた同人誌 *Kobe Miscellany*（神戸大学英米文学会）の終刊記念論集であることを告げる副題が付いていることに気がついて、明るい気分が一瞬にして暗転した。やはり文学を愛する有志の熱意だけで、文学研究が生き残ることができる時代ではなくなったのか。

文学部不要論に代表される昨今の風潮に対する義憤は、川成洋・吉岡栄一・伊澤東一共編『英米文学に描かれた時代と社会——シェイクスピアからコンラッド、ソロー』（悠光堂、2017.12）の「はしがき」の中でも表明されている。上記論集の中には、山根正弘のジョージ・ハーバート論、長尾輝彦のワーズワス論、木村聡雄のロジャー・マ

## 回顧と展望

クゴフ論などが収録されており、どれも一読に値する文章であるが、文学をないがしろにする時代を痛罵する「はしがき」の中で、イギリス最高の宗教詩人と称されるジョージ・ハーバートの名前が「ジョン・ハーバート」と誤記されていることを見つけて、いささか興奮めした。同人誌『アレーティア』を32年間守ってきた遠藤光は、その終刊号の「編集後記」の中で、誤記をめぐる若き日の苦い思い出を達観した口調で語りつつ、長年の編集作業にあたっては、一言一句をおろそかにしないことを座右の銘としてきたと文学研究者の矜持を込めて述懐している。文学を大切にしようという思いを他人に伝えるためには、まず、自分自身が文学を大切にしなければならないと自戒した次第である。

(同志社大学教授)